

「リリカル・バラッツ」の形成(2)

著者	吉田 冬蔵
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	10
ページ	61-81
発行年	1981-03-25
URL	http://doi.org/10.14983/00000198



『リリカル・バラッド』の形成 (2)

新潟歯学部 吉 田 冬 蔵

Tozo YOSHIDA: The Making of *Lyrical Ballads* (2)

(1980年11月5日 受理)

『リリカル・バラッド』の形成 (2)

II

初版所載の Coleridge の作品

Coleridge が後年『文学的伝記』(*Biographia Literaria*) で理論的に説明しているように、『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*) が計画された当時、彼は所謂『二種類の詩』のうちの一つすなわち『出来事と行為者は、すくなくとも部分的には、超自然的である』のような種類の作品を分担し、『超自然的なまたは少なくともロマンティックな人物や性格』を描き出す方へ力を向けたのだった。そして『この見解を以て私は「老水夫の歌」(*The Rime of the Ancient Mariner*) を書いた。また他の詩の中で「黒髪の婦人」(*The Dark Ladie*) と「クリスタベル」(*Christabel*) を準備していた。この「クリスタベル」で、私の始めの企てすなわち「老水夫の歌」でやったよりもずっと以上に私の理想を実現すべきはずだった。しかし Wordsworth 君の勤勉が美事に功を奏したことになり、また同君の作品の数がずっと大きなものになったので、私の作品は均衡を得るのではなくて、むしろ場違いの物を挿し挟むという風に見えた。』¹⁾

Coleridge の準備は結局ととのわなかったので『黒髪の婦人』も『クリスタベル』も『リリカル・バラッド』初版(1798年)には載らなかった。それで『文学的伝記』に上記の如く書いてある通り、また Wordsworth が『自叙伝的覚書』(*Autobiographical Memoranda*)の中で『「老水夫」および他の2, 3篇』²⁾と述べているように、初版に収められた Coleridge の作品は共著者のものに比べると不釣合に少なくなってしまった。両詩人の作合計23篇のうち前者は4篇後者は19篇だから、唯数的に見れば約5分の1ほどでしかない。『老水夫の歌』は658行³⁾で巻中の最長篇だが、しかし4篇を皆合わせてもその占める頁数は全体に対してやはり凡そ5分の1くらいにしか当たらない。

Coleridge の4篇は『老水夫の歌』のほか『乳母の話』(*The Foster-Mother's Tale*), 『夜鶯』(*The Nightingale*) および『囹圄』(*The Dungeon*) である。これらは初版23篇中でそれぞれ第1, 第2, 第4および第14番目に配列された。始め巻頭に在った『老水夫の歌』は第2版(1800年)で第1巻の第23番目すなわち巻尾の『ティンタン僧院』(*Tintern*

Abbey)の前に、第3版(1802年)では第19番目に置き換えられた。第2版では Wordsworth の作中『リッチモンド』(Richmond)が二つに分割され又『囚人』(The Convict)が削除され、他方 Coleridge の『恋』(Love)が新しく加えられて、彼の作品は計5篇に殖えた。しかし第3版で『囹圄』が除かれてまた4篇となった。1805年の第4版では前版と同様である。第2版の『恋』については後で述べることとして、此処では初版中の4篇について其の成立経過をみてみよう。

III

The Rime of the Ancyent Marinere

The Rime of the Ancyent Marinere, in Seven Parts は前号で述べたように⁴⁾、各種の資料——Dorothy の1797年11月20日附書翰、『ケエンの彷徨』(*The Wanderings of Cain*)の序註(Prefatory Note)、『イザベラ・フェニック註』(*The Isabella Fenwick Notes*)、Wordsworth の『自叙伝的覚書』、『オールフォックスデン日記』(*The Alfoxden Journal*) 1798年3月23日の項、その他——から判定して、およそ1797年11月から翌1798年3月の間に書かれたと見てよいわけである。

ところで、Coleridge の書翰集⁵⁾を開くとバラッドについて書かれているところが幾つか眼につく。その一つは1797年11月20日頃——すなわち Dorothy が徒歩旅行を報じている手紙と同じ時分——に書かれたと推定されている書翰で、Coleridge は『リリカル・バラッド』の出版者 Joseph Cottle に宛ててドイツ語やフランス語の勉強に励んでいることを述べているが、其処で彼は『私は凡そ300行のバラッドを書きました。』⁶⁾と知らせている。このバラッドは時日と行数とからみると1797年に書かれた『クリスタベル、第一部』(331行。1816年初刊)に該当するものかも知れない。しかし初版に収載された総行数658行の未だ半分にも達していないものの、『老水夫の歌』を指しているとも考えられる。

また翌1798年1月6日附の書翰は当時彼が庇護を受けていた唯一神教派牧師 John Prior Estlin に宛てた無心状だが、その中にバラッドへの言及がある。『目下一文無しなのです。……』それに18ポンド以上の借金があり、『今それを払うために貴殿から10ポンド借用せねばなりません。……私のバラッドを Phillips に売る積りです。彼はきっとそれで5ポンド寄越すでしょう……』⁷⁾ 此処で言われているバラッドは『老水夫の歌』を指していると直ちに断言はできかねるが大体はそうだと思う。当時は未だ完成していなかったろうが、とにかくそれを Richard Phillips の経営している *Monthly Magazine*⁸⁾ に売り込もうという目算を述べているのだから、作品はこの頃既に目鼻がついていたこと

と推定出来る。ただ此の目論は実現しなかった。このバラッドが『老水夫の歌』でないなら1798年春に書かれた『三つの墓』(*The Three Graves*)あるいは当時1月初旬に完成乃至それに近かった『クリスタベル、第一部』だったかもしれない。

この手紙の日取から約40日後、同年2月18日附 Cottle に宛てて詩集の企画を告げ更にこれも亦財政逼迫の事情を訴えている手紙がある。『私のバラッドを仕上げました——340行です。「幻想」を続けてゆくつもりです——全部あわせて(断片として、私の悲劇の2場面を印刷するでしょうから)1,500行を増加できます——』⁹⁾ この後に Coleridge は出版すべき詩集について Cottle の意見を求め悲劇『オソリオ』(*Osorio*)を加えて更に1巻をふやすべきかなどと尋ねている。此の場合の詩集とは1796年初刊の彼の『雑詠詩集』(*Poems on Various Subjects*)の新版を言っているらしい。また此処で『幻想』と書いてあるのは『オルレアンの乙女の幻想』(*The Visions of the Maid of Orleans*)¹⁰⁾を、『悲劇の2場面』とは『オソリオ』からの抜萃の『乳母の話』と『囹圄』とを意味している。ところで、此処に出てくるバラッドは、340行という数を考えると、『老水夫の歌』に当りそうにない。此の頃書かれていたバラッドとしては『黒髪の婦人のバラッド』(*The Ballad of the Dark Ladie*)や『クリスタベル、第一部』が想い浮かべられるのである。前者は40行だからあてはまってこないが、後者は一応それらしく思える。しかしこの点で学者の見解は一致しない。書翰集の編集校訂者 Griggs の意見ではこれらの手紙の ballad は皆『老水夫の歌』を指しているとみているようだ¹¹⁾。だが断定するにはなお疑が残る。

以上 Coleridge の二、三の書翰から、『老水夫の歌』の制作経過について更に補足的に考えてみたわけだが、その過程は明白に出来ないけれども、やはり1797年11月から以後約5ヶ月、翌年3月下旬にいたる間に執筆されたということは解る。

次に『老水夫の歌』と Wordsworth との関係、この詩の主題、他作家からの影響、詩の素材などの諸点について、おもに作品の成立過程の立場から瞥見してみたい。

この海洋奇談の核心をなす信天翁の件は Wordsworth の寄与によるものである。『フェニックス註』の語っている通り、George Shelvocke の世界周航記中に在る記事¹²⁾——一羽の黒いあほうどりが幾日も船について来るので順風を願う船員の一人がその黒い色から不吉の鳥と考えて射殺してしまったという話から思いついて Wordsworth が Coleridge に提供したのだった。

Wordsworth の語るところによると『物語の大部分は Coleridge 君の案出だった；しかし或る部分は私みずからが暗示した；たとえば、ある罪が犯されて、それが結果として「老航海者」(Coleridge がこの者を後に好んで呼んだ言い方だが)の身の上に怪奇な責苦

と彼自身の彷徨とをもたらしことになるという次第だった。私は一日二日前に Shelvocke の「航海記」の中で、ホーン岬を回航する時、その緯度の辺で最大の種類の海鳥で或るものは翼を拡げると12乃至13フィートに及ぶあほうどりをしばしば見たという事を読んでいて。私は Coleridge に「南海に船が入ると此の者が斯ういう鳥の一羽を殺して、其の海の守護精霊が罪の仕返しに任に当るということにしたらどうだろうか」と言った。これは目的に適うと考えられそれで採り上げられた。私はまた死人によって船を航行させることを暗示した。しかし詩の結構にそれ以上何か関係したかは想い出せない。』¹³⁾

Wordsworth の寄与によって、犯罪とその応報との因果関係の土台が具体化して来たわけである。死者による船の運航の筋立ては Alexander Dyce に依っても伝えられている John Cruikshank の骸骨船の夢の話と連関することで、この趣向に就いては、既に前号で述べたように¹⁴⁾、Wordsworth も関与していた。

『老水夫の歌』は最初は両詩人の共作の予定だったのが、両人の詩風が殆ど一致しないことがわかったので、Coleridge 一人の手にゆだねられることになり¹⁵⁾、Wordsworth の筆になる部分は数ヶ所だけにすぎなかった¹⁶⁾。

『老水夫の歌』にどのような想念が盛られているかについては読む人によって意見がちがうだろう。此処に記すことはその一つに過ぎない。

犯罪に対する刑罰として或は贖罪の所行として、艱難の窮地に沈められ或は苦界の彷徨を続けるという想念は何時の世にも極めて納得を得安い一般的通念だろう。Wordsworth の唯一の劇『国境の人々』(*The Borderers*)の終幕で主人公 Marmaduke は娼婦の一切を棄てて放浪の旅路に就くのである。『老水夫の歌』にもこの想念が流れている。元々此の作品は、Coleridge の記す所によれば、Wordsworth と共同制作の企図で書き始めた『ケェンの彷徨』の執筆が挫折して、『その代りに書かれた』¹⁷⁾ ものだった。信天翁を射ころして炎熱氷寒の洋上を漂う水夫を作者が構想した場合、同時に詩人は脳裡に弟殺しの大罪を犯した人類の遠祖やゴルゴタの丘への途次永久のさすらいに該当する行為をしたユダヤ人を想っていたと推察してもよからう。カインのすがたが水夫のそれと重なり合っていたとみてよい。またエデンの東方へ追われた者と永遠にさまようユダヤ人とは連想される関係にある。

元々いわゆるさまようユダヤ人の中世伝説は欧州文学の好材料である。イギリス18世紀末頃の詩文にも好んで扱われた材料だった。1765年に上梓、やがて浪漫主義復活の一温床となった Percy の『英国古詩拾遺』(*Reliques of Ancient English Poetry*)の中にはこれを題材にしたバラッドが収められている¹⁸⁾。『リリカル・バラッド』の約2年前洛陽の

紙価を高からしめた M.G. Lewis の『僧』(*The Monk*)¹⁹⁾ にもこのたぐいのユダヤ人が現われる。Wordsworth も『リリカル・バラッド』第2版第ii巻に『さすらいのユダヤ人の歌』(*Song for the Wandering Jew*) を載せて、『昼夜をわかつた心で放浪者の難儀を感じる』ことを歌っている²⁰⁾。

Coleridge も『さすらいのユダヤ人、ロマンス』(*Wandering Jew, a romance*) というものを構想したことがあったようだ²¹⁾。K. Coburn 編集の龐大な『コウルリヂ雑記帳』(*The Notebooks of S.T. Coleridge*) を探してみると気付くことだが、事実『老水夫の歌』はこの伝説とつながっていたのだ。彼は斯う書いている:『老水夫を年よりの船乗りとして現わすことは馬鹿げた大失錯だ。彼は私の心の中では永久にさまようユダヤ人だった——彼の若い時分50年も前にやった航海以来一萬回もこの話を語っていたのだ。』²²⁾

『老水夫の歌』の中の次のような象徴的扱い方や表現の仕方は古くから伝承されて来ているこの彷徨者を想像する場合の共通的描写としてうなずけることだろう。老水夫に罪が負わせられて『十字架の代りに 阿呆鳥がわが頸に 懸けられたり』²³⁾ とか、『輝く眼の水夫』が話相手を魔力にかけたように『きらめく眼差を以て捕え』²⁴⁾ とか、また老水夫が懺悔話を繰り返して辛うじて心の安堵を得ようと、

『此処彼処と、夜の如く、さまよい；

言葉の奇しき力を持ち；

人の顔見るやたちまち

我が事聞く可き者と知る。』²⁵⁾

というような叙述はみなそうである。

『英国古詩拾遺』は Romantic Revival を育てる土壌になり当代の詩歌に新しい花を開かせたが、Wordsworth や Coleridge も亦この書に負うこと多大であり、其処に収載のバラッド類は両詩人が珍重措かないものだった。『リリカル・バラッド』初版の形の『老水夫の歌』は中世風な雰囲気醸し出す好古的表現や古風な綴と語句などで溢れていたが、これらは『古詩拾遺』特に『サー・コーリーン』(*Sir Cauline*) に学ぶところが少なくなかった。なお、Coleridge の『クリスタベル』のヒロインの名前も『サー・コーリーン』中の Christabelle 姫に由来していると思われる²⁶⁾。

『老水夫の歌』と Matthew Gregory Lewis の作品との間にも何等かのつながりが考えられる。Coleridge は額に燃える十字架を印せられたユダヤ人の現われる小説『僧』を読んでおり1797年にその批評を書いたが²⁷⁾、この人気当代随一だった‘Monk’Lewis のゴシック風メロドラマ『城の怪』(*The Castle Spectre*) も読んでいた。Wordsworth も

1798年5月下旬 Bristol でこの劇の上演を観たが、彼はむしろこれを蔑視した²⁸⁾。Coleridge は同年1月 Wordsworth に宛てた手紙の中で『城の怪』を論評し、Lewis のバラッドの卒直簡朴さをほめている²⁹⁾。『老水夫の歌』第Ⅲ部中の骸骨船上の幽霊女と『その生身無き伴侶』³⁰⁾についての凄絶な描写は Lewis やビュルガー (Bürger) のバラッドに似たものがあると言われる³¹⁾。ただこの部分は現在普通に行なわれている版では書きかえられてしまっているの、始め初版に現われた場合に感じられた程のむき出しの凄味は薄められている³²⁾。

Coleridge が『英国古詩拾遺』など古いバラッドに対して感じた興味は当然近代乃至同時代の謂わば創作バラッドへも及んで行った。ドイツ語に親しんでいた彼がドイツのバラッド文学の巨星 Bürger に引きつけられたのも自然のことだろう。Gottfried August Bürger の『レノーレ』(Lenore) は Coleridge が未だ2才くらいの1774年に出て自国の人々を魅了しつくしたが、イギリスでは1796年すなわち Bürger の死後2年 Walter Scott や William Taylor によって英訳され、同年一ケ年で5種類にものぼる翻訳が出た。Taylor の訳 *Ellenore* は同年3月の *Monthly Magazine* に載せられ、是を若干書き改めたものも刊行されていた。この雑誌は Coleridge 達が自作を売り込もうとしていた月刊誌である。Taylor は1790年代に Lessing, Goethe, Wieland なども英訳し、ドイツ文学の導入に努め、また *Monthly Review* 誌等に拠って健筆をふるっていた。

Coleridge がこの William Taylor に宛てた手紙があるが、それには彼が Wordsworth と Bürger の作品の評価について論評を交わした際、『私が Bürger を偉大な詩人と考えたということではなく、Wordsworth が認めようとしないうれした点の幾つかをほんとに Bürger が持っていたということで、私達の議論は果てませんでした。』³³⁾と書かれている。

Bürger の作品は不気味で不可思議な戦慄させるような雰囲気をかもし出している。Taylor の英訳は『古詩拾遺』風な措辞にならって此の調子を伝えており、当時大いに世にもてはやされた。Coleridge はこの英訳の言葉づかいからも得る所があったようだ。

Coleridge は1798年11月ドイツ滞在中妻に宛てた長文の手紙の中にも『レノーレ』と Bürger について語っている。この詩の中で歌われているように³⁴⁾、ドイツの家の扉のベルが開閉の度に鳴り響くことを話した後で Coleridge は書き足している：『追伸——今のところでは、Bürger はドイツの全詩人中でも私の気に入っている——斯の *Lenore* はどの翻訳よりも大に優っている。Bürger の妻は不貞だった、で彼は心痛で死んだ——彼女は今ハンブルグでいかにわしい女になり女優をやっている！——雌狐奴!!——』³⁵⁾ 斯ういうような手紙の調子からみても Coleridge は Bürger に傾倒しておったことがうか

がわれる。

当然 Bürger の影響は少なくなかったわけだ。『リリカル・バラッド』の刊行後間もなく Robert Southey が評論雑誌で『老水夫の歌』を批評した際『ドイツ風の荘重さをねらった企て』³⁶⁾と書いたのは作者が Bürger を下敷きにして書いていると評者は考えたからだろう。

Coleridge の創作に稍影響したと思われる他のドイツの作家は Wieland である。Coleridge が『老水夫の歌』を計画し始めた1797年11月中旬頃出版者 Cottle に宛てた手紙の中に『私はヴィーラントの「オーベロン」(Oberon) を訳します——難しい言葉ですがぜひいざい解釈出来る限りしっかり訳します。』と書いている³⁷⁾。

Christoph Martin Wieland の詩『オーベロン』は1780年すなわち Coleridge が漸く8才の頃に世に出た。この作品については1797年夏 *Monthly Review* に紹介記事が載せられたが³⁸⁾、Coleridge は多分これを読んだことだろう。『オーベロン』には航海中罪を犯してそのため非常な艱苦を嘗めて罪を贖うという筋立てが含まれており、この点は『老水夫の歌』と同工異曲の感じがする。

『老水夫の歌』の中の海洋描写は船乗り暮しの経験の無かった作者の筆から描き出されているのだが、この記述の材料となったものは Coleridge が17、18世紀の旅行記や航海記から得ていた知識だった。この種類の書物を読み漁ることは Wordsworth と同様 Coleridge も亦好んでいた。この作の執筆に当り当然多数の文学的素材が博識の彼の頭の中を去来したと思われる。それについての研究考証は既に半世紀前斯の Lowes の大著が上梓されて委細を尽してしまった観があるので、爾来後進は是に教えられるだけで新たに加える可き余地は殆ど無いように見える。拙論もこの項に関しては Lowes に導かれる外にな

い。此処では無数の素材のうちからほんの二、三にふれるだけにとどめる。

『老水夫の歌』の物語の中心点になる信天翁は、前述したように、Wordsworth に依ると Shelvocke から彼が提供したのだが、Lowes の見解では Coleridge 自身が始めから Shelvocke の航海記を知っておったようだ³⁹⁾。

Thomas De Quincey は1810年に読書の際たまたま Shelvocke のあほうどりの記事にぶっつき是が『老水夫の歌』の胚種だったと感じて、この点を Coleridge に糺したが納得のいくような返事を得られなかった様子で、De Quincey はこのことを彼独得の筆録で『英国湖畔詩人回想』(Reminiscences of the English Lake Poets) の中に書いている⁴⁰⁾。

Shelvocke の外に詩材の出典として Lowes は Martens, Cook, Bartram, Purchas 等

実に多数の名を挙げている。

第Ⅰ部の、帆柱ほども高く『エメラルドの如く緑色』⁴¹⁾に輝く氷山を浮かべた氷海の叙景は多分 Frederick Martens の『スピッツベルゲンおよびグリーンランドへの航海』(*The Voyage into Spitzbergen and Greenland*) やその他の極洋航海者の記録からと思われる⁴²⁾。是の航海記は1671年に行なわれた探険旅行の記述で1675年にハンブルグで出版され、英訳も出ていた。なお Martens の名は Wordsworth の旧蔵書目録⁴³⁾にも載っていた。

第Ⅱ部に見られる、風落ち船は動かず飲み水も無く『海底迄も腐敗せる』熱海の状態や『ぬらつく物ぬらつく海上に脚以て這いぬ。』⁴⁴⁾ という様な情景は Cook の『太平洋航海記』(*A Voyage to the Pacific Ocean*)⁴⁵⁾ その他から暗示されたものだろう。この James Cook の書は Martens より一世紀以上経て、1776年から1780年にかけての5年間に為された北半球航行記で1784年に3巻の形で公刊された。始めの2巻を彼が書き、第3巻は Captain James King が書いた。

第Ⅲ部中に、三日月の弧の両端の殆ど中に明るい星が一つ輝いており其の月光の照らす下で船乗り達が一人一人呪の眼を水夫に向けて倒れてゆく異様な場面がある⁴⁶⁾。この場合の月と星の特殊な位置については Cook の航海記中に『月の暗い周縁の後に星の潜入すること』⁴⁷⁾ という記事があって、この天体現象の説明に丁度該当している。Coleridge はこのような特別な形の『星に追われる三日月』に関して、『星が月を追う場合にはいつも何か兇事が起るとというのが船乗り達の間に普通の迷信である。』⁴⁸⁾ と註記している。

『老水夫の歌』の三日月はこの作品が書かれていた当時の『オールフォックスデン日記』の文句に想到させる。Dorothy は1798年3月21日の條に書いている：『私達は Coleridge の家でお茶を飲んだ。……私達が帰ると空が一部雲に覆われた。三日月がかくれた。……』⁴⁹⁾ またその2日後23日は、前に記したが、Coleridge が Wordsworth 兄妹を訪れ『彼のバラッドを仕上げて持って来た』その日である。三人は例の如く散歩に出たが、Dorothy は当日の日記の終りに『美しい夕べ、大層星が多く、三日月。』⁵⁰⁾ と書いた。Coleridge の脳裡には Alfoxden の空の三日月と幽霊船を照らす三日月とが同じように輝いておったことと思われる。

次も自然現象に関する叙述だが、第Ⅴ部で熱帯圏のすさまじい雷雨の様子を語って、

『断崖下る瀧のごと、

電光は落つ真一文字

急流大河のさまなして』⁵¹⁾

と述べているあたりは Bartram の旅行記中の記述と結びつけて考えられる。William

Bartram のアメリカ諸地方旅行記⁵²⁾は1791年に出版されたばかりの新しいものだったが、其の記事は Coleridge の『ケエンの彷徨』『リュウティ』(Lewti) そのほかの作品にも投影されている⁵³⁾。Wordsworth の場合にも、1799年ドイツでの作で『リリカル・バラツ』第2版第ii巻にのせられた『ルース』(Ruth)の中に描かれているアメリカ大陸の風物は Bartram に負うているところがあると言われる⁵⁴⁾。

これも亦自然現象に関与していることだが、第II部の中に貿易風と思われる海洋の風についての詩句がある⁵⁵⁾。『東の和風吹き継ぎ、白き海泡飛び、船跡のどけく続き』と船が太平洋に入っていくのを歌っているところは頭韻を駆使した流麗無比の律動的佳句としてよく知られている部分だが、此処の breeze⁵⁶⁾という言葉づかいは Samuel Purchas⁵⁷⁾ 編集の旅行記などに見られる brise という古語へ迄たどられる。

Purchas の名を聞くと直ぐ連想させられるのは1816年版詩集⁵⁸⁾中の『クブラカーン：夢の中の幻想。断片』(Kubla Khan: or, A Vision in a Dream. A Fragment.)である。これは彼が『バーチャス歴程記』(Purchas His Pilgrimage)の中に書かれた上都(Xanadu)に於ける忽必烈汗に就いての記述を読んでいたことから生れた。この詩につけられた作者の自註に言う：『1797年の夏に、筆者は当時身体具合が悪かったのだが、……Porlock と Linton との間の寂しい農家に引きこもって居った。微恙のために阿片を服用させられていたが、その効能で腰掛けたまま眠りに陥ちた。まさしくその時筆者は「バーチャス歴程記」の中の次の文または同趣旨の言葉を読んでおった：「此処に大王忽必烈は宮殿とそれに加えて壮大なる庭園を築造するよう命じたり。斯くて肥沃の地10哩は壁を以て囲まれたり。」』⁵⁹⁾ Coleridge は、世によく知られた話だが、斯うして3時間ほど深く眠り、覚めるや直ぐあの『夢の中の幻想』54行の『断片』が書きとめられたのである。逸話に事欠かぬ Coleridge の生涯のうちでも特異の話柄だが、それはともかくとして、Purchas 編纂の『歴程記』が彼の作品に影響していたことを判然と示している。これは『クブラカーン』の場合だけでなく『老水夫の歌』についても言へることだろう。

なお、往時の旅行記などには本文の外にグロスを付け加える形式がよく用いられていたが、『老水夫の歌』の後年の版に是に類する形が採り入れられた。これは Purchas その他 のやり方に意識的にせよ無意識的にせよ倣ったものだろうと思われる⁶⁰⁾。

『老水夫の歌』は、現在では Oxford Editions of Standard Authors のような普通標準版には、本文欄外に散文で以て要点を摘記した註解的説明文すなわち marginal gloss が付けられている。この傍註について Wordsworth は斯う言っている：『この詩に後になって付けられた摘要説明は当時私達二人のどちらにも考えられていなかった。少なくとも

それについて私は仄聞さえもしていなかった。で、疑もなくそれは理由もない後になっての思いつきなのである。』⁶¹⁾ 概要註解は元来『リリカル・バラツ』の諸版には附けられていなかったもので、1817年の Coleridge 詩集 (*Sibylline Leaves*) で始めて附け加えられたものである。Wordsworth が言っているように不必要で御節介な後智慧だったかも知れないが、読者の存在を頭に置いたら、後年の古語や稀用語の減少と同じく一般の理解し易さには役立つと考えられたのだろう。

『老水夫の歌』は初版には最初に短い『梗概』(*Argument*)を附けられていた。是は第2版で、詩の本文がだいぶ書き改められたように、おおよそ水夫を中心とした記述に書き換えられた。(下記の上の行は初版の文、
下の行は第2版の文。)

『船が {赤道を通過し
始め赤道へ航行したるも} 暴風に駆られて南極の方寒冷の地に流されたる
次第; {而して其処より大太平洋の熱帯圏へ航行したる次第; およびふりかかりたる異様
なる事柄に就きて;
くの奇しき裁きを経たる始末;} ならびに {老水夫が
此の者が} 如何なる仕様にて己が故国に
戻り着きたるかの顚末。』⁶²⁾

この『梗概』は第3版、第4版には取り除かれた。そして1817年版詩集以後は前述のグロスが実質上是を補ったような形になった。

『老水夫の歌』の『リリカル・バラツ』初版に於ける標題 *The Rime of the Ancyent Marinere, in Seven Parts* は第2版で古風な綴を消して *The Ancient Mariner. A Poet's Reverie.* と改められ、新しく『詩人の幻想』というサブタイトルが添えられた。この副題は読者が不可思議な物語へ戸惑いしないで近づき易いようにとの意図から加えられたのだろうが、Charles Lamb は是では却て読者の空想をこちらからひっくり返してしまうだけで、『織匠ボトムが自分は獅子ではなくて唯舞台で獅子に化けているだけなんだと宣言するのと同様に下手なことだ』⁶³⁾ と忠告した。Lamb の批評が容れられてこの副題は第3版本文の標題からは抹消された。だが印刷過程での見落としから同版の半標題には残されてしまった。次の第4版にも依然としてそのままだった。しかし1817年版詩集でまた *The Rime of the Ancient Mariner, in Seven Parts* となった。

『老水夫の歌』の本文は初版では7部 151連 658行だった。第2版でかなり沢山の語句について書き直された。第2版の本文は第3、第4版にも受けつがれた。第4版では7部 143連 619行になった。この詩は1817年詩集中に始めて作者名を伴って収録されたが、是の版中の本文は多くの部分に互って書き改められた最終稿に近いものである。1828年及び1829年の3巻詩集を経て最後の1834年版詩集に至る間も僅少の改訂がされた。現在普通に読まれている形は1817年版テキストを若干改めたものである。

IV

Coleridge の他の作品

『リリカル・バラッド』初版で2番目の順に置かれている『乳母の話』(*The Foster-Mother's Tale*)は、14番目の『圀圀』と同じく、Coleridge の劇『オソリオ』からの抜萃である。『オソリオ』は Richard Sheridan に乞われて執筆した5幕の悲劇で、1797月3月に書き始められた。同年6月始め Coleridge が Joseph Cottle に宛てて伝えているように、『私達の友人 Wordsworth の Racedown Lodge に数日の間滞在』した時 Coleridge は『オソリオ』の未定稿を持参していた。『Wordsworth は私の悲劇を褒めています。……それが私に大きな希望を与えます。Wordsworth も彼自身悲劇を書きました。……』⁶⁴⁾ Wordsworth の劇とっているのは勿論『国境の人々』を指しているが、この作品は上演を思うに任せなかったように、Coleridge の劇も10月頃執筆して Drury Lane 劇場へ送ったが舞台上せることは出来なかった⁶⁵⁾。『オソリオ』は後年になって更に手を加えられ『悔恨』(*Remorse*)と改題されて、1813年1月に今度は首尾よく Drury Lane で上演された。この劇からの抜萃2篇はこれだけ劇中から抜き出しても作品構成上には直接支障はなく、独立の詩の形にできる部分である。Coleridge が Joseph Cottle へ宛てた手紙中の説明を借りると、『私の劇からのこの抜萃は劇に何の種類の関係も有りませんし、「老水夫の歌」のようにそれ自体で一つの物語です。』⁶⁶⁾

『乳母の話』は Albert とその恋人 Maria との両名を育てた乳母が Maria に話す物語である。『オソリオ』の第Ⅳ幕から81行を抜いたものだ。初版では『劇的断片』、第2版以後は『劇的無韻詩の対話』という副題が付けられていた⁶⁷⁾。

『圀圀』は捕えられた Albert が獄中でする独白の部分である。第Ⅴ幕からの30行に該当する⁶⁸⁾。『圀圀』が載せられたのは初版と第2版だけで、第3版と第4版とには除かれてしまった。

Coleridge のもう一つの作品は第4番目に置かれた『夜鶯；問答詩』(*The Nightingale; a Conversational Poem, written in April, 1798*)で、110行の対話体詩の秀作である。問答体の形式は Coleridge が好んでしばしば用いている様式で、『老水夫の歌』でも水夫と婚礼の饗宴の客との間の対話の形で使われている。この様な形式を巧みに駆使すれば単なる平叙体よりももっと詩形に変化を与え表現効果を挙げ得るわけである。この詩は副題中に示されている通り1798年4月に書かれた。作者は同年5月10日付で Wordsworth 宛にユーモラスな韻文体の手紙を書き、『気の抜けた無韻詩形でかび臭い主題』を歌ったこの詩を送る旨を伝えている⁶⁹⁾。

本篇中『わが友、わが友の妹!』⁷⁰⁾と呼び掛けている相手は言うまでもないことだが Wordsworth 兄妹である。兄妹と Coleridge の3人は1798年の春の頃、彼等の住む Alfoxden や Nether Stowey 附近の林野の散策を朝夕楽しんでた。『オールフォックスデン日記』を開いて見ればその様子はよく窺える。この様な折々の楽しい事がらが詩作に反映するのは当然である。Dorothy の簡素な筆致の記述と Coleridge 作品中の詩句とが読者の頭の中で連想される⁷¹⁾。『クリスタベル第一部』冒頭の梟の鳴き声や春のなお冷ややかな夜などの叙述が Dorothy の日記の文章とよく照応していることは広く世に知られていることである。5月6日の条下に『雨の朝——夕刻大層快適。散策に出た折 Coleridge に会う。共に Stowey に到る; 夜鷺を聞く; 土蚕を見る。』⁷²⁾と記されている。当時は両名の詩友としての心のゆきかきが愈々深まって来ていた時で、Dorothy も加えて3人の是の日のような散歩がたえずくり返されており、夜鷺の声に傾聴し乍ら語り合うことも多かった筈で、その間おのずから是の間答体詩が形成されたのだろう。

この詩の主題は、作者自身が『かびくさい』と Wordsworth に向って面白可笑しく自己批評をしていた通り、当時の雑誌などに普通の陳腐なものかも知れないが、結果は決して因襲的月並みに陥ることなく、却て新鮮な興趣を溢れさせている。その興味の一つは、夜鷺を Milton が『たぐいなく憂鬱な』鳥と感じ、また世人も『世々々々』そのように思い込んできた扱い方に対して作者が過去の世間の紋切型とは違う感じ方をしているということである。同じ鳥を題材とした『夜鷺に寄せて』(To the Nightingale) は、『月の吟遊詩人、たぐいなく音楽的な、たぐいなく憂鬱な鳥』⁷³⁾の歌声も『この上なくいとしき者、わがセアラ』⁷⁴⁾の声程には美しくないことを歌っているのだが、その場合には『憂鬱な』鳥という伝統的感じ方に何も疑問は表明されていなかった。この詩は1795年の作だが、その凡そ3年後1798年春に書かれた『夜鷺』では『自然のうちには憂鬱なるもの無し』という風な扱い方がされている。この受け取り方の変化は興味がある。

『聴け! 夜鷺は歌い始む、

「たぐいなく音楽的、たぐいなく憂鬱なる」鳥!

憂鬱なる鳥? ああ、おこたれる思い!

自然のうちには憂鬱なるもの無し。』⁷⁵⁾

『たぐいなく音楽的、たぐいなく憂鬱なる』は Milton の『沈思の人』(Il Penseroso) からの句である⁷⁶⁾。作者は Milton の詩句に反するような感じ方を開陳するのを気にしてか、此処で脚註を加えて釈明し、此の Milton の秀句は憂鬱な人物について用いられているから劇的適切性が有るので作者が軽率にも Milton に言及するの責を負わされる恐れを避け度いと断っている⁷⁷⁾。Coleridge にとっては夜鷺は『愛の歌を歌うに四月の夜の

短かすぎるをかつ』楽しい鳥である⁷⁸⁾。

Coleridge が夜鶯の歌声に興味を持っていたことは Hazlitt も書いている。William Hazlitt が未だ20才の頃1798年6月初旬 Coleridge の Nether Stowey の家に客となった際 Wordsworth 兄妹にも知遇を得た。長滞在中の一夕この年少気鋭の理論家は『Wordsworth と形而上学的議論に入り込んだ。が、私達はどちらも自分の考えを充分はっきり又のみ込めるようにすることは出来なかった。他方ではその間 Coleridge は Dorothy に向って夜鶯の様々ななき声について説明していた。』⁷⁹⁾ 当時の 両詩人についていろいろ興味深いことを後世に伝えてくれている Hazlitt もこの時 Coleridge が夜鶯に関してどんなことを話していたかは書き残してくれなかったが、多分彼の『夜鶯』の詩の中に歌われているような事がらも話の中に出てきていたのだろう。なお、この時の形而上学的論議が契機となって Wordsworth の『忠告と返事』(*Expostulation and Reply*) や『局面転換』(*The Tables Turned*) が書かれたと言われている。

夜鶯については Wordsworth も Coleridge と近い感じ方をしておったようである。後年であるが、『憂鬱なものと誤って呼ばれた』⁸⁰⁾ と言い、『「火焰の心」の生き物』⁸¹⁾ と見ている。また John Wilson に宛てて詩論を展開した書翰に斯う書いている：『夜鶯のはんとの性格に関して大変間違った考えが世々代々広まって来ています。「リリカル・バラッド」の中の私の友人の詩が読まれている限り、それは斯かる考えを是正するのに大層貢献するでしょう。』⁸²⁾

Coleridge の『夜鶯』の中で囀っている鳥は、ギリシヤの昔から伝承されて来た伝説の中の鳥——舌を切られて化身させられた燐れなフィロメーラではなく、往古からの無数の詩歌物語にとり入れられ習俗化され剝製化された鳥でもない。これは現実眼の前に大自然の中の一員として生の喜びを囀っている活気あふれる生物なのである。それで此の詩が『気の抜けた』『かびくさい』⁸³⁾ 感じを払拭して大変新鮮な旋律を響かせることになる。

『夜鶯』は個人的事柄を材料としている無韻詩だが、この点で他の一連の秀作、『深夜の霜』(*Frost at Midnight*)、『此のしなのきの四阿は我がひとや』(*This Lime-Tree Bower my Prison*)、『イーオラスの堅琴』(*The Eolian Harp*) などとその軌を一にしている。『深夜の霜』は1798年2月揺籃の長子 Hartley を前にしての感懐、『しなのき』は1797年6月 Charles Lamb の来訪の際奇禍に遇っての偶成、『イーオラスの堅琴』は1795年8月 Sarah Fricker に寄せて Clevedon で書かれた相聞であるが、これらは皆自己的身辺的経験を素材として物された逸品で、『夜鶯』と同類のものである。

此の詩の中に語られているように、Stowey の彼の家から程遠くない所に巨きな城がありその近くに拡がっている森には夜鶯が沢山棲息していた。城は Egmont 伯爵の Enmore

Castle である。『この城の直ぐ近く人づきのよい家庭にこの上なくしとやかな乙女が住んで居り、』⁸⁴⁾ 夜鷺の声に耳を傾けてよく其の歌声を心得ていた。Coleridge の歌っているこの乙女は Egmont 伯の執事の娘 Ellen Cruikshank である。すなわち『老水夫の歌』の幽霊船の素材と成った骸骨船の夢を見た John Cruikshank の妹に当る。『夜鷺』はこのように作者に身近な様々な事態を背景にして歌い出されたものである。

『夜鷺』は本来は『リリカル・バラッド』の初版に収められる予定ではなかった。この詩ではなくて、同じ作者の『リュウティ；サーカシア風恋歌』(*Lewti; or the Circassian Love Chant*) が入れられる筈になっていた。それが印刷段階になって急遽『夜鷺』と差替えられたのである。『リュウティ』は Wordsworth の早期の作 *Beauty and Moonlight* を土台として Coleridge が改稿した詩で、既に *Morning Post* 紙1798年4月13日号に発表されていた。『リリカル・バラッド』は匿名で出版される筈になっていたから、『リュウティ』を載せるとすれば匿名の企図が裏切られるので、本篇は取り除かれることにされたのだ。『リュウティ』は82行であり、『夜鷺』は110行⁸⁵⁾の長さだったために、印刷途中の変更は本の頁付を狂わせてしまう結果になった。

1903年に早く『リリカル・バラッド』再刻版を編集校訂した George Sampson に依ると⁸⁶⁾、大英博物館所蔵の初版本で元 Robert Southey の旧蔵書だった物は扉頁の下部に Bristol: | Printed by Biggs and Cottle, | For T.N. Longman, Paternoster-row, London. | 1798. というインプリントを有する稀覯本だが、この珍書には *Lewti* の標題を載せた目次頁と廃棄された筈の頁とが容れられているとのことである。Southey 本の写真複製版⁸⁷⁾が近年出版された。

[つづく]

註

- 1) "...a series of poems might be composed of two sorts. In the one, the incidents and agents were to be, in part at least, supernatural;...my endeavours should be directed to persons and characters supernatural, or at least romantic;...With this view I wrote *The Ancient Mariner*, and was preparing among other poems, *The Dark Ladie*, and the *Christabel*, in which I should have more nearly realized my ideal, than I had done in my first attempt. But Mr. Wordsworth's industry had proved so much more successful, and the number of his poems so much greater, that my compositions, instead of forming a balance, appeared rather an interpolation of heterogeneous matter." *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross (Oxford, 1907), II, xiv.
- 2) Christopher Wordsworth, *Memoirs of William Wordsworth* (Moxon, 1851), i, 16. Cf. 『「リリカル・バラッド」の形成(1)』紀要第9号(1980), 42, 47.

- 3) 658, *L.B.* 1798 ed.; 619, *L.B.* 1805 ed.; 625, *The Complete Poetical Works of S.T. Coleridge*, ed. Ernest H. Coleridge (Oxford, 1912), i.
- 4) 紀要第9号, 35-43.
- 5) *Collected Letters of S.T. Coleridge*, ed. Earl Leslie Gigg (Oxford, 1956-1971), 6 vols. [以下 *L.C.* と略す。]
- 6) "I have written a ballad of about 300 lines." No. 212. To Joseph Cottle, c. 20 Nov. 1797. *L.C.*, i, 357.
- 7) "I am now, utterly without money...now in order to pay it I must borrow ten pound of you,...and will sell my Ballad to Phillips who I doubt not will give me 5 £ for it—" No. 218. To John Prior Estlin, 6 Jan. 1798. *L.C.*, i, 368.
- 8) Cf. 紀要第9号, 38, 44n.27.
- 9) "I have finished my ballad—it is 340 lines. I am going on with the Visions—all together (for I shall print two scenes of my Tragedy, as fragments) I can add 1500 lines—" No. 233. To Joseph Cottle, 18 Feb. 1798. *L.C.*, i, 387.
- 10) See *The Destiny of Nations. A Vision. P.W. of S.T.C.*, ed. E.H. Coleridge, i, 131n., 136n.
- 11) *L.C.*, i, 387n.2.
- 12) George Shelvocke, *A Voyage round the World*. (London, 1726). Cf. John Livingston Lowes, *The Road to Xanadu. A Study in the Ways of the Imagination* (Houghton Mifflin, 1927. Rev. 1930), xiii, 204-8, 208n.18 (485-6). 紀要第9号, 41.
- 13) "Much the greatest part of the story was Mr. Coleridge's invention; but certain parts I myself suggested; for example, some crime was to be committed which would bring upon the Old Navigator, as Coleridge afterwards delighted to call him, the spectral persecution, as a consequence of that crime and his own wanderings. I had been reading in Shelvocke's *Voyages*, a day or two before, that, while doubling Cape Horn, they frequently saw albatrosses in that latitude, the largest sort of sea-fowl, some extending their wings twelve or thirteen feet. 'Suppose,' said I, 'you represent him as having killed one of these birds on entering the South Sea, and that the tutelary spirits of these regions take upon them to avenge the crime.' The incident was thought fit for the purpose, and adopted accordingly. I also suggested the navigation of the ship by the dead men, but do not recollect that I had anything more to do with the scheme of the poem." *The Isabella Fenwick Note to We are Seven* in Christopher Wordsworth, *Memoirs*, i, 107. A.B. Grosart, *Prose Works of William Wordsworth*, iii, 16-7.
- 14) 紀要第9号, 40-1.
- 15) Cf. Christopher Wordsworth, *op. cit.*, i, 16, 107-8. A.B. Grosart, *op. cit.*, iii, 16-7. 紀要第9号, 39, 42.
- 16) 19-20, 218-9 (1798 ed.), Cf. 紀要第9号, 38.
- 17) *Prefatory Note to The Wanderings of Cain*. 紀要第9号, 37, 44n.17.
- 18) *The Wandering Jew. Reliques of Ancient English Poetry*, ed. Thomas Percy (J.M. Dent, 1906), ii.

- 19) Matthew Gregory Lewis, *The Monk. A Romance*, ed. Howard Anderson (Oxford, 1973). 紀要第4号, 292.
- 20) "Night and day, I feel the trouble
Of the Wanderer in my soul." *Song for Wandering Jew*, 19-20.
- 21) Cf. J.L. Lowes, *op. cit.*, i, 15. xiv, 227.
- 22) "It is an enormous blunder...to represent the An. M. as an old man on board ship. He was in my mind the everlasting wandering Jew—had told this story ten thousand times since the voyage, which was in his early youth and fifty years before."
The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge, ed. Kathleen Coburn (Pantheon Books, 1957), i, 45n.
- 23) "Instead of the Cross the Albatross
About my neck was hung." 137-8 (1798 ed.); 141-2 (1912 ed.).
- 24) "The bright-eyed Marinere" 24 (1798 ed.); 20 (1912 ed.).
"He holds him with his glittering eye—" 17 (1798 ed.); 13 (1912 ed.).
- 25) "I pass, like night, from land to land;
I have strange power of speech;
The moment that his face I see
I know the man that must hear me;" 619-22 (1798 ed.); 586-9 (1912 ed.).
- 26) "Faire Christabelle, that ladye bright." *Sir Cauline*, 36. Cf. E.L. Griggs, *op. cit.*, 379n.
- 27) *Coleridge's Miscellaneous Criticism*, ed. Thomas Middleton Raysor (Constable, 1936), 373.
- 28) Cf. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years, 1787-1805*, ed. E. de Selincourt, rev. Chester L. Shaver (Oxford, 1967), 210-11, No. 84. W.W. to James Tobin, 6 Mar. 1798.
- 29) No. 225. To W. Wordsworth, 23 Jan. 1798. *L.C.*, i, 379.
- 30) "That woman and her fleshless Pheere" 180 (1798 ed.). See 181-90, 195-8 (1798 ed.); 183-92, 197-200 (1805 ed.); 190-2 (1912 ed.).
- 31) M.G. Lewis, *Alonzo the Brave and Fair Imogene*, 59-61.
G.A. Bürger, *Lenore*, 237-48. *Sämtliche Schriften*, Karl Reinhard (J.C. Dieterich, 1796. Georg Olms, 1970), i.
- 32) See 30).
- 33) "Our controversy was continued, not that I thought Bürger a great poet, but that he really possessed some of the excellences which W. denied to him;..." No. 315. To William Taylor, 25 Jan. 1800. *L.C.*, i, 566.
- 34) *Lenore*, 101-2.
- 35) "N.B.—Bürger of all the German Poets pleases me the most, as yet—the *Lenore* is greatly superior to any of the Translations. Bürger's wife was unchaste, & he died of a broken Heart—She is now a Demirep & an Actress at Hamburg!!—A Bitch!!" No. 259. To Mrs. S.T. Coleridge, 8 Nov. 1798. *L.C.*, i, 438.

- 36) "an attempt at German sublimity" *The Critical Review*, Vol. XXIX, Oct. 1798. Coleridge: *The Critical Heritage*, ed. J.R. de J. Jackson (Routledge & Kegan Paul, 1970), 53.
- 37) "I am translating the Oberon of Wieland—it is a difficult Language, and I can translate at least as fast as I can construe." No. 212. To Joseph Cottle, c. 20 Nov. 1797. *L.C.*, i, 357.
- 38) *The Monthly Review*, Aug., Sep. 1797.
- 39) J.L. Lowes, *op. cit.*, 485-6.
- 40) Thomas De Quincey, *Reminiscences of the English Lake Poets* (J.M. Dent, 1907), 7.
- 41) "as green as Emerauld" 54. Cf. 51-4 (1798 ed.); 53-60 (1805 ed. Emerauld>Emerald).
- 42) "as green as an Emerald" Frederick Martens, *The Voyage into Spitzbergen and Greenland* (Eng. tr. 1694), 35. Friedrich Martens, *Spitzbergische oder Groenlandische Reise-Beschreibung gethan im Jahr 1671* (Hamburg, 1675). J.L. Lowes, *op. cit.*, ix, 129-30.
- 43) *The Transactions of the Wordsworth Society* (Edinburgh U.P., 1883, rptd. Wm. Dawson, 1966), VI, 215, The Rydal Mount Lib. Cat. No. 171. J.L. Lowes, *op. cit.*, 437-8.
- 44) "The very deeps did rot." 119 (1798 ed.); 123 (1912 ed. deeps>deep).
 "...slimy things did crawl with legs
 Upon the slimy Sea." 121-2 (1798 ed.); 125-6 (1912 ed.).
- 45) James Cook, *A Voyage to the Pacific Ocean. Undertaken by the Command of His Majesty for making Discoveries in the Northern Hemisphere...In His Majesty's Ships the Resolution and Discovery...* (London, 1784), ii, 257. Cf. J.L. Lowes, *op. cit.*, v, 81n.56.
- 46) 次の引用は 1798 ed. 201-7。1805 ed. の 203-9 に該当する。両版の本文の差異は此の部分では殆ど無い。[] の内に併記したのは現行決定版(1912年 E.H. Coleridge 編, 註3記載)の本文で、この版では209-15に該当する。
 "While clombe [Till clomb] above the Eastern [eastern] bar
 The horned Moon [,] with one bright Star [star]
 Almost atween the tips [Within the nether tip].
 One after one [,] by the horned [star-dogged] Moon [,]
 (Listen, O Stranger! to me) [Too quick for groan or sigh],
 Each turn'd [turned] his face with a ghastly pang [,]
 And curs'd [cursed] me with his ee [eye]."
- 47) "an immersion of (a star) behind the moon's dark limb." James Cook, *op. cit.*, ii, 114, J.L. Lowes, *op. cit.*, xi, 168.
- 48) "It is a common superstition among sailors 'that something evil is about to happen whenever a star dogs the Moon.'" J.L. Lowes, *op. cit.*, xi, 168n., 466n.54.
- 49) "We drank tea at Coleridge's....At our return the sky partially shaded with clouds. The horned moon was set...." *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. Ernest de

- Selincourt (Macmillan, 1959), i, 13. March 21st 1798.
- 50) "...He brought his ballad finished....A beautiful evening, very starry, the horned moon." *Ibid.* March 23rd 1798.
- 51) "Like waters shot from some high crag,
The lightning falls* with never a jag
A river steep and wide." 316-8 (1798 ed.); 318-20 (1805 ed.); 324-6 (1912 ed. falls* >fell),
- 52) William Bartram, *Travels through North and South Carolina, Georgia, East and West Florida, etc.* (Philadelphia, 1971).
J.L. Lowes, *op. cit.*, i, 8, 408n.22.
- 53) J.L. Lowes, *op. cit.*, 468, 471, 540.
- 54) *Ibid.*, i, 9, xvii, 287-8, 409, 411. *Ruth*, 55-66.
- 55) "The breezes [fair breeze] blew, the white foam flew,
The furrow follow'd [followed] free."
上の引用は 1798 ed. (および L.B. 諸版)の 99-100。Definitive ed. の 103-4 に該当する。
[] の内に併記したのはこの版の本文である。なお follow'd は1817年版詩集 (*Sibylline Leaves*) に於てだけ streamed off と書き改められた。1828年版詩集以後は元に復した。
其の理由に就いては1817年版に作者の自註があり, E.H. Coleridge の definitive ed. や OESA 版に採録されている。
- 56) *O.E.D.* の breeze と brise との項を参考に摘記する。
Breeze, sb.²
1. orig. A north or north-east wind; spec. applied within the tropics to the NE. trade-wind.
 2. The cool wind that blows from the sea by day on tropical coasts.
 3. A gentle or light wind :... (この項の用例中に Coleridge の句が引用されている)
- Brise, obs. form of Breeze....
- 57) Samuel Purchas, *Purchas His Pilgrimage, or Relations of the World and the Religions observed in all Ages and Places discovered, from the Creation unto this Present.* (London, 1613). *Hakluytus Posthumus, or Purchas His Pilgrimes* (London, 1625).
- 58) *Christabel, Kubla Khan, The Pains of Sleep.*
- 59) "In the summer of the year 1797, the Author, then in ill health, had retired to a lonely farm-house between Porlock and Linton....In consequence of a slight indisposition, an anodyne had been prescribed, from the effects of which he fell asleep in his chair at the moment that he was reading the following sentence, or words of the same substance, in *Purchas's Pilgrimage*: 'Here the Khan Kubla commanded a palace to be built, and a stately garden thereunto. And thus ten miles of fertile ground were inclosed with a wall'." *P.W. of S.T.C.*, ed. E.H. Coleridge, i, 295-6.
Cf. J.L. Lowes, *op. cit.*, xix, 324ff.
- なお、この自註の文中で "the summer of the year 1797" は Coleridge の誤記である。
従来 "the summer of 1798" (E.H. Coleridge, 295) 或は "the early summer of 1798"

- (J.L. Lowes, xix, 325) の誤と考えられていた。しかし “late September or October 1797” (M. Moorman, *W.W.*, i, 346.) とも推定されるしその他異説も多くてにわかには決め難い。
- 60) Cf. J.L. Lowes, *op. cit.*, xvii, 298, 528n.77.
- 61) “The gloss with which it (=the poem) was subsequently accompanied was not thought of by either of us at the time, at least not a hint of it was given to me, and I have no doubt it was a gratuitous after-thought.” *The I.F. Note to We are Seven, etc.* in *The Prose Works of W. Wordsworth*, ed. Alexander B. Grosart, (Moxon, 1876), iii, 17.
- 62) *Argument*, 1798.
 “How a Ship having passed the Line was driven by Storms to the cold Country towards the South Pole; and how from thence she made her course to the tropical Latitude of the Great Pacific Ocean; and of the strange things that befell; and in what manner the Ancyent Marinere came back to his own Country.”
Argument, 1800.
 “How a Ship, having first sailed to the Equator, was driven by Storms, to the cold Country towards the South Pole; how the Ancient Mariner cruelly, and in contempt of the laws of hospitality, killed a Sea-bird; and how he was followed by many and strange Judgements; and in what manner he came back to his own Country.”
- 63) “...it is as bad as Bottom the weaver’s declaration that he is not a lion but only the scenical representation of a lion.” *The Letters of Charles Lamb, to which are added those of his sister Mary Lamb*, ed. E.V. Lucas (Dent and Methuen, 1935), i, 240. To Wordsworth, 30 Jan. 1801.
- 64) “I am sojourning for a few days at Racedown, the mansion of our friend Wordsworth:...Wordsworth admires my Tragedy—which gives me great hopes. Wordsworth has written a Tragedy himself...” No. 190. To Joseph Cottle, 8 Jun. 1797. *L.C.*, i, 325.
- 65) Cf. 『ワーズワスとゴドウィン思想(2)』紀要第4号(1975), 293.
- 66) “The extract from my tragedy will have no sort of reference to my tragedy, but is a Tale in itself, as the ancient Mariner.” No. 250. To Joseph Cottle, 28 May 1798. *L.C.*, i, 412.
- 67) *Osorio*, Act IV, Sc. I, ll. 154-234. “A Dramatic Fragment” 1798 ed.; ll. 169-234. “A Narration in Dramatic Blank Verse” 1800 ed. 初版の ll. 1-16 および ll. 69-70 省略。
- 68) *Ibid.*, Act V, Sc. I, ll. 107-36.
- 69) “In stale blank verse a subject stale
 I send *per post* my *Nightingale*,” No. 244. To William Wordsworth, 10 May 1798. *L.C.*, i, 406.
- 70) “My Friend, and my Friend’s [thou, our (1817 ed.)] Sister!” *The Nightingale*, 40.

- 71) *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. E. de Selincourt (Macmillan, 1959), i, 5-16.
Jan. 31st, Feb. 3rd, 4th, 5th, 6th, 13th, Mar. 7th, 21st, 23rd, 24th, 25th, 26th, Apr.
2nd, 3rd, 6th, 9th, 13th, 18th, 24th, 27th, May 6th, 7th, 8th, 16th.
Christabel, 1-5. 14-22, 43-52.
- 72) "May 6th, Sunday....A rainy morning— very pleasant in the evening. Met Coleridge
as we were walking out. Went with him to Stowey; heard the nightingale; saw
a glow-worm." *Journals of D.W.*, i, 16.
- 73) "...Minstrel of the Moon!
'Most musical, most melancholy' Bird!" *To the Nightingale*, 16-17.
- 74) "My Sara—best beloved of human kind" *Ibid.*, 24.
- 75) "And hark! the Nightingale begins its song,
'Most musical, most melancholy' Bird!
A melancholy Bird? O idle thought!
In nature there is nothing melancholy." *The Nightingale*, 12-15.
- 76) "Most musical, most melancholy!" John Milton, *Il Penseroso*, 62.
- 77) "*Most musical, most melancholy*. This passage in Milton possesses an excellence
far superior to that of mere description: it is spoken in the character of the
melancholy Man, and has therefore a *dramatic propriety*. The Author makes this
remark, to rescue himself from the charge of having alluded with levity to a line
in Milton...." Coleridge's footnote to l. 13 of *The Nightingale*, 1798.
- 78) "As he were fearful, that an April night
Would be too short for him to utter forth
His Love-chant..." 46-8.
- 79) "I got into a metaphysical argument with Wordsworth, while Coleridge was ex-
plaining the different notes of the nightingale to his sister, in which we neither
of us succeeded in making ourselves perfectly clear and intelligible." William
Hazlitt, *My First Acquaintance with Poets* in Percival P. Howe, *The Life of
William Hazlitt* (Penguin, 1949), 66.
- 80) "...that strain of joyance holy
Which the sweet Bird, misnamed the melancholy,
Pours forth in shady groves" *To Enterprise* (w. 1820? pub. 1822.), 145.
- 81) "O Nightingale! thou surely art
A creature of a 'fiery heart'" *O Nightingale! thou surely art* (w. 1806, pub.
1807.), 1-2.
- 82) "What false notions have prevailed from generation to generation of the true
character of the Nightingale. As far as my Friend's Poem, in the 'Lyrical Ballads',
is read, it will contribute greatly to rectify these." Wordsworth's *Letter* to (after-
wards) Professor John Wilson ['Christopher North'] in Christopher Wordsworth,
Memoirs, i, 196 and A.B. Grosart, *Prose Works*, ii, 211.
- 83) See 69)
- 84) "A most gentle maid

Who dwelleth in her hospitable home

Hard by the Castle,..." 69-71 (1798 ed.); 64-66 (1805 ed.).

85) 110 lines 1798 ed.; 105 lines 1805 ed. vol. i.; 110 lines 1912 ed.

86) *The Lyrical Ballads, 1798-1805*, ed. George Sampson (Methuen, 1903), 353, 358.

87) *Lyrical Ballads, 1798*. A fac. of Southey's copy of the first ed. (Scolar Press, Menston, Yorks., 1971).